

## ジェフリー・チョーサー作

### 『善女列伝』(3)

—性愛に殉じた聖女伝集—

地村彰之・笹本長敬\* 訳

岡山理科大学教育学部中等教育学科

\*大阪商業大学元教授

(2018年10月25日受付、2018年12月6日受理)

#### 『善女列伝』の写本について—記憶の鍵—

地村(2018)によると、記憶に基づいて想像力と理性を働かせて、事実を言語によって記録していくことは、私たちに与えられた特権であると言う。事実として記録されたものは貴重な遺産となる。私たちのように過去の文献を研究するものは、記録された文献をできる限り客観的に分析することを目標とする。そして、書き記すことによって、私たちの考えた証となる論考や随筆を残そうとする。それは、消えることのない記録として後世に伝達するものになる。(地村2018: 2)

チョーサーは『善女列伝』*Legend of Good Women* (以下 *LGW* とする)において、「記憶の鍵」という言葉を使い、古い書物へのこだわりの気持ちを真摯に伝えている。F 版では、“And yf that olde bokes were awaye, / Yloren were of remembraunce the keye. / Wel ought us thanne honouren and believe / These bokes, there we han noon other preve.”(*LGW*, F (25-28)) (もし古い書物が消失していれば、/ 記憶の鍵は失われるでしょう。/ 他に証拠がないところでは、/ そのときはこれらの書物を敬い信用すべきです。)と書かれている。G 版では、“And yf that olde bokes were awaye, / Yloren were of remembraunce the keye. / Wel oughte us thanne on olde bokes leve, / There as there is non other assay by preve.”(*LGW*, G (25-28)) (もし古い書物が消失していれば、/ 記憶の鍵は失われるでしょう。/ 他に証拠によって立証できないところでは / そのときは古い書物に信頼をおくべきです。)と書かれている。G 版での“olde bokes”の反復と“other assay by preve”という類語反復による証拠に重きを置く姿勢は、チョーサーが何年か後に書き換えを必要とする状況に置かれたことを暗に示しているかもしれない。

*LGW* の写本としては、12点の Manuscripts (incomplete) と Thynne's edition (1532) が知られている。Chaucer Society がそれらの transcriptions を作っている。そのうち6点の facsimiles が出版され、F と G が代表的なものと評価されている。F: Fairfax 16, Oxford Bodleian Library, fol. 83-119<sup>v</sup> と G (Gg): Cambridge University Library Gg 4.27, fol. 445-480<sup>v</sup> である。テキストの内容はいずれも未完で、年代判定が極めて難しい。F. N. Robinson は G 写本が最古のもので、他と比べて完成度が高い写本であると判断し、G 写本を基本的なテキストとして選んでいる。更に、彼は F も良好な写本であると考えている。F Prologue は早くて1386年に始まり、遅くとも1388年までに作成されたと言われている。G Prologue は Richard 2世の妻 Anne 王妃が亡くなった年である1394年に書かれたと推定されている。私たちの底本である *Riverside Chaucer* (1987) はこの Robinson 版に従って編集されているテキストである。定本では F 版と G 版がパラレルに並列されて書かれている。従って、私たちの『善女列伝』(1) (2016) は、F 版と G 版を二つのコラムに対応させながら日本語に翻訳したものである。本邦では、G 版のみの翻訳はあるが、F 版と G 版を並列して翻訳したものはまだ存在していない。

ここで *LGW* について簡単にまとめてみる。*LGW* は一つの Prologue と連続する9つの tales (legends) からなる約2700行(正確にはF版で数えれば2723行、G 版で数えれば2689行)の詩である。*LGW* はチョーサーの芸術的技法の発展を知る上で重要な作品である。Prologue は夢物語詩 dream vision の形をとり、それはチョーサーの dream vision の最後の詩となり、しかも最高の詩の一つとなっている。

チョーサーはこの作品に heroic couplet (弱強五歩格[十音節]二行連句)の韻律形式を初めて(もしかすると英語の詩で初めて)使用した(厳密には F420-21, G408-9 においてチョーサーが書いたと述べている ‘the love of Palamon and Arcite / of Thebes’ に初めて使用したと思われる)。heroic couplet は後の『カンタベリー物語』のほとんどの部分にも使用されることになる。また Prologue は、両方の版ともに、チョーサーが読んだフランスの love vision 詩と lyric に、特に Deschamps の詩に、多くの影響を受けている。

そして、それぞれの legend には題材として様々な文学的典拠を利用している。中でも利用したのは Ovid である。しかし、

Virgil, Guido delle Colonne そして他の（時には特定できない）作者たちのものも利用した。文学的モデルは聖者伝である。善女たちは「殉教者たち」として描かれている。作品のひな型となるものとしては、Boccaccio の『著名な女性たちについて』*De Claris mulieribus* が頭の中に焼き付けられていたかもしれない。これは、チョーサーの殉教者たちのほとんどが含まれている、操の高い女性たちの物語を集めた書であるからだ。チョーサーは気持ちのうえでは Ovid's *Heroides* ほうが Boccaccio の上記作品よりも身近に感じていたのであろう。*Heroides* に関しては、チョーサーはおそらく解説や注釈付きの写しで読んだと思われる。そして、ことによると 'Filippo' によるイタリア語訳の書を携えて読んだかもしれない。

## 5

## ルクレティア伝

殉教者タル、ローマ ノ

ルクレティア ノ 伝

ココニ始マル

さあ私はローマの諸王の追放について語らねばならない。 1680  
 彼らは恐ろしい所業をしたためである。  
 とりわけ\*最後の王タルクィニウスの追放のことを語らねばならない。  
 \*オウィディウスとティトゥス・リウィウスが語っているからである。  
 しかし私がこの話をするのは、その追放の理由を語るためではなく、  
 貞節な妻女たる、真に誠実な\*ルクレティアを 1685  
 称え、記憶にとどめておいてもらうためである。  
 彼女は真の妻に相応しい態度と貞節のゆえに、  
 \*異教徒たちが彼女を褒め称えただけでなく、  
 \*われらの言い伝えの中で  
 \*大聖アウグスティヌスと呼ばれるお方も 1690  
 ローマの町で亡くなったこのルクレティアに深く同情された。  
 どういう風に亡くなったかについては、短く取り扱うだけにして、  
 この事柄の主な部分のみ触れてみる。  
 非常に意志堅固で肉体強靱だったローマ人たちが  
 \*アルデアの町を攻囲していた時のこと、 1695  
 その攻囲は非常に長きにわたったが、殆ど効を奏さなかった。  
 そのためローマ人たちは幾分退屈な気分になってきた。  
 するとタルクィニウス皇子はふざけて  
 からかい始めた、彼は軽口をたたく人だったからだが、

つまらない毎日だ、 1700  
 誰も自分の妻以上の働きをしていない、と言った。  
 「そこで妻のことを話そうじゃないか、それが一番だ、  
 みんな好きなように自分の妻を褒め称えろ。  
 妻の惚気話<sup>のうけなし</sup>をして心を慰めようじゃないか」  
 \*コラティヌスと呼ばれる騎士がにわかに立ち上がつて、 1705  
 こう言った「ですが、殿下、  
 \*百聞は一見に如かず、でございます。  
 私には妻がいますが、確かに、妻をいつもよく知るみなさんから良妻だと思われております。  
 \*今夜ローマに行きましょう、そうすれば分かると  
 思います」 1710  
 タルクィニウスは答えた「そう願いたい」  
 彼らはローマにやって来て、さっそく  
 コラティヌスの家に行き、馬から降りた。  
 タルクィニウスが降り、コラティヌスも降りた。  
 夫は秘密の入口をよく知っていたので、 1715  
 密かに家に入り、  
 \*また門には番人もいなかったのもので、  
 部屋の戸口まで行って立ち止まった。  
 この高潔な妻は束ねた髪を解いてベッドぎわに座り、  
 良からぬ事など思いもよらなかったからだが、 1720  
 怠惰や退屈を避けるために  
 柔らかな毛糸を編んでいたと、\*我らの本は語っている。  
 召使いたちにはやるべき仕事をするように命じて、  
 尋ねるのである「お前たちはどんな便りを聞いているのかい。  
 包囲について人はどう言っているのかい、どんな噂なの？ 1725  
 城壁が落ちればいいのにねえ！  
 旦那様が町を離れてからも随分長くなるわ。  
 だから恐ろしくて私はひどく心配で、  
 その包囲のことを思い、その場所のことを思うと、  
 \*剣で胸が貫かれるような気がして怖いわ。 1730  
 神様、旦那様をお助け下さい、お願いです、どうか旦那様にお恵みください！」  
 そして、さらにまことに切なく泣き、  
 もう自分の仕事に集中できなくなり、

いじらしく目を落とした。  
 その様子は彼女の人のまことによく似合っていた。  
 誠実に満ちた、彼女の涙もまた、 1736  
 良妻たる貞淑に色を添えた。  
 彼女の顔色は彼女の心そのままを表すのである。  
 行ないも素振りもびったり一致していたからだ。  
 その言葉を聞くと夫のコラティヌスは、 1740  
 妻が気づく前に、飛び込んで、  
 言った「心配いらないよ、ただ今、帰ったよ」  
 彼女はすぐに嬉しそうな顔つきをして立ち上がり、  
 妻たちがいつもするように、彼に迎えるキスをした。  
 誇り高い皇子タルクィニウスは、 1745  
 彼女の美しさと顔立ち、  
 金色の髪、体つき、物腰、  
 肌の色艶、嘆いた言葉遣いを観察した時、  
 (彼女の美しさは地のままのものだったので)  
 この夫人に対して大変な欲情に捕らわれた。 1750  
 心の中でそれが火のように激しく燃え、  
 思慮分別がなくなってしまった。  
 彼女はものにならないだろうと思い、  
 絶望的になればなるほど、  
 彼女を無暗に欲しくなり、彼女の美しさを思うの  
 だった。 1755  
 彼の見境のない欲望はすべて彼の欲情のせいだった。  
 明くる朝、小鳥がさえずり始めると、  
 タルクィニウスは包囲軍にひそかに戻ろうと、  
 彼女の姿をいつも新たに脳裏に刻みながら、  
 一人だけになって安心して歩んだ。 1760  
 「あの人の髪はこうなっていた、顔色はこのように艶  
 やかだった。  
 このように座り、このように話し、このように紡ぎ、  
 顔立ちはこうだった、  
 顔はこのように美しかった、物腰はこうだった」と、  
 このような好ましい空想が彼の心を新たに占めた。  
 海は嵐に大いに揺さぶられると、 1765  
 嵐が去ったあとも、  
 一日二日その余波で海はうねるだろう、  
 まさにそのように、彼女の姿はなかったけれども、  
 彼女の容姿を偲ぶ楽しさは残存した。  
 しかしながら、それは楽しさではなく欲情、 1770  
 あるいは下心ある邪悪な欲望が、残ったのである――  
 「あの人の気持はどうであろうと、愛人にするのだ！  
 \*常に勇敢に振舞う人にこそチャンスが訪れるものだ。  
 どんな結末に終わろうと、俺はそれをやるぞ」  
 そこで彼は剣を帯びて出かけた。 1775  
 ローマにたどり着くまでまっしぐらに駒を進め、  
 道中、ただ一人で連れもなく、  
 \*コラティヌスの家までたどった。

太陽は沈み、昼の光を失うと、  
 彼は秘密の通用口から入り、 1780  
 夜の闇のなか泥棒の如く足音を忍ばせた。  
 みんなは休みに就いたが、  
 誰もこのような不義を夢想だにしなかった。  
 窓からか、それとも他の手段によって入ったのか、  
 分らないが、彼はすぐに剣を引き抜いて、 1785  
 この気高い妻ルクレティアが寝ていた所に入った。  
 彼女は目を覚ますと、ベッドに圧迫を感じた。  
 「どんな動物でしょう、こんなに重いものは？」  
 「王の息子、タルクィニウスだ」と彼は言った。  
 「だがな、叫ぶか物音を立てるか、 1790  
 もしくは誰かを起こすようなことをすれば、  
 それぞれの人をお造りになった神にかけて、  
 この剣をお前の心臓に突き刺すぞ」  
 そう言って彼女の喉元に飛びかかり、  
 鋭い切っ先を彼女の心臓に突きつけた。 1795  
 彼女は一言も言えなかった、その力がなかったのだ。  
 何が言えるだろうか。彼女は度を失ってしまった。  
 まるで独りぼちの仔羊が狼に見つかった時のようで、  
 誰に向かって嘆きの声や悲しい声をあげられようか。  
 ああ、彼女は頑丈な騎士と闘えようか。 1800  
 男どもは女に力がないことをよく知っているのだ。  
 喉元をつかまれ、剣を心臓に突きつけられたら  
 ああ、叫べようか、どのようにして逃げられようか。  
 許しを乞い、できることなら何でもしますと言った。  
 この残忍な男は言った「俺の言うことを聞かぬなら、  
 わが御霊を加護されるユピテルに誓って、 1806  
 俺は馬小屋でお前の召使いを殺し、  
 お前のベッドに寝かせておいて、  
 お前の不義を見つけたぞと、大声で叫んでやる。  
 こうしてお前は身を滅ぼし、名声も無くするのだ。1810  
 お前には他に取るべき道がないからな」  
 \*その当時ローマの人妻たちは  
 自分の名声を大事にし、恥をひどく恐れた。  
 彼女も同様に、世の中傷を恐れ、死を恐れるあまり、  
 すぐに気を失い、気絶してしまった。 1815  
 気絶したまま、完全に死んだようになっていたので、  
 彼女の腕や頭を切ろうと思えば切ることができるほど、  
 彼女は美しいも醜いも、何もかも、感じなくなった。  
 タルクィニウスよ、汝は王の後継者である、  
 そして、血筋と権利によって、 1820  
 君主として真の騎士として振舞わねばならないのだ。  
 なぜ騎士の規範を蔑んだのか。  
 なぜこの夫人に極悪非道をしたのか。  
 ああ、これが汝の悪辣な行為だったのだなあ！  
 さて本題に戻ろう、物語を読んだところでは、1825  
 この不幸な出来事が起こってタルクィニウスが去ると、

夫人はすべての友達を、  
父を、母を、夫を、みんな一斉に呼びにやった。  
そして当時の女性たちが  
友達の埋葬に出かける時のような装いをして、 1830  
きれいな髪をすっかり乱して、  
悲しげな様子で家の広間に座っていた。  
友達はたずねた、どうなさったのか、  
どなたが亡くなったのかと。彼女はずっと泣きながら  
座って、  
恥ずかしさのために、一言も発することができず、  
また彼らをあえて見ることもできなかった。 1836  
しかし、ついに彼らに、タルクィニウスとの  
この悲しい出来事、この恐ろしい事柄をすべて話した。  
\*彼女と友達みんなが一緒に暮れた  
この悲しみを語ることは、不可能であろうに。 1840  
\*たとえ人びとの心が石から作られていたとしても、  
その出来事を聞くと彼女を憐れんだことだろう、  
彼女は心から誠に良妻に相応しく、信実だったのだ。  
彼女は言った、わたくしの罪や受ける非難のために、  
夫は名を汚すようなことがあってはなりません、 1845  
わたくしは断じてそんなことを許しませんと。  
\*彼らはみんな、誓って答えた、  
あなたを赦します、赦すのが正しいことですから、  
それは罪ではありません、あなたの力に及ばなかった  
ことなのですと。  
そして彼らは彼女に多くの事例を語った。 1850  
だが、すべて無駄だった、彼女はすぐにこう言った  
から。  
「いかにお赦しがありましても、  
いたずらにお赦しを受けられません」と。  
そう言いながら彼女はひそかにナイフを握り、  
それでもって自分の命を断ってしまった。 1855  
彼女は倒れながらも、目を向けて、  
自分の着衣の乱れを気づかった。  
倒れた時なおも自分の足やそのようなものが  
露わにならないように気を配ったからである。  
それほど彼女は清純と信実を愛おしんだのだ。 1860  
ローマの町全体は彼女に同情して悲しみ、  
\*ブルートウスは彼女の貞節な血潮にかけて誓った、  
この行為によってタルクィニウスとその一族すべてを  
追放処分にとすると。そして臣民に呼びかけて集め、  
彼らみんなにこの話を腹藏なく話した。 1865  
そして、彼女が受けた婦女暴行の恐ろしい行為を  
人びとが見聞することができるように、  
彼女を公然と柩の上に乗せて町中に運ばせた。  
ローマの町にはその日以来、王はいなくなり、  
ローマでは彼女は聖者と考えられた。 1870

そして\*彼女の日は常に法律に則って神聖な日として  
深く崇められた。気高い妻、ルクレティアは、  
\*ティトゥスが証言しているように、こうして生涯を閉  
じたのだ。

私がこれを語るのは、彼女は愛にまことに信実だっ  
たからであり、  
自ら進んで新しい恋人に乗り換えたりしなかったから  
である。 1875  
さらに、彼女はこういう女性たちの中にいつも見受け  
られる  
志操の堅固な心とまじめで優しい心根の持ち主だった  
からである。  
このような女性たちはこうと決めれば、そこから動か  
ないのである。  
\*キリストご自身が語っておられることを私はよく知  
っているからだ、  
国広しといえど、イスラエルにおいて、 1880  
女性ほど立派な誠実な心を保ち続けているのを  
見たことはどこにもなかったと、これは嘘ではない。  
翻って男はどうかといえば、ほら、彼らはいつも何た  
る暴虐を  
行なっていることか、試したいなら、ぜひ彼らを試し  
てみなさい。  
最も真心のある男でも、全く移ろいやすく当てになら  
ないのである。 1885

殉教者タル、ローマ ノ

ルクレティア ノ 伝

ココニ終ワル

6

アリアドネ伝

アテナイ ノ アリアドネ ノ 伝

ココニ始マル

\*黄泉の国の裁判官、クレタ島の王、ミノスよ、  
さあお前の出番が来た、さあ闘技場に姿を現すのだ。  
私がこの物語を書くのは、お前のためだけでなく、  
テセウスのとんでもない不実の愛の記憶を



再び蘇らすためだ。 1890  
 上天の神々はお前に対して怒り、  
 お前の犯した罪に復讐がなされたのだ。  
 恥ずかしさに顔を赤らめなさい！ さあお前の伝記を  
 始めるぞ。

クレタ島の権勢の強い王であり、  
 百もの多くの手強く大きな都市を支配していた  
 ミノス王、 1895

息子のアンドロゲオスをアテナイの学校へ遣った。  
 そこにおいて、たまたまこのようなことが起こった。  
 \*アンドロゲオスは、まさにその町で、哲学を学んでいた時、

殺されてしまったのである、ほんの妬み心のために。  
 いま語っている偉大なミノス王は、 1900

殺された息子の仇を討つためにやって来た。  
 \*アルカトエをミノス王は激しく長く攻めたてののだ。  
 しかしながら、その城壁は非常に手強く、  
 その都市の王であったニソスは、

大変勇敢なうえに恐れ知らずである。 1905  
 ニソスはミノスもその軍隊も一顧だにしていなかった。  
 だがついにある日のこと偶然の出来事が起こった、  
 \*ニソスの娘が城壁の上に立って、  
 城攻めの状況を逐一観察したのである。

たまたま小競り合いが生じた時 1910  
 彼女はミノス王に心を注いでしまった。

彼の美しい顔立ちと騎士らしい益荒男ぶりのために、  
 死んでもいいと思うほど彼に恋い焦がれてしまった。  
 この経過を手短にやり過ごすために言うと、  
 彼女は、彼がこの都市を意のままにして、 1915

そこの住民の生殺与奪の権を握れるような地位を、  
 勝ちとれるようにしてやったのだ。

しかし彼は彼女の親切を仇で返し、  
 神々が彼女を哀れに思わなかったら、 1919

彼女は悲しみと苦悩の淵に迫いやられたことだろう。  
 だがいまその話を続けると長くなり過ぎることだろう。

\*ミノス王はアテナイもまた、  
 アルカトエや他の町のように攻略してしまった。  
 その結果、ミノスはアテナイの人びとに  
 激しく迫って、\*毎年彼らの大事な子どもを 1925  
 自分に差し出さねばならないようにした。

後でお聞きになるように、子ども達の命を奪うためだ。  
 ミノス王は\*一匹の怪物、つまり一匹の邪悪な獣を飼  
 っていた、

怪物は非常に残酷だったから、  
 人が目の前に現れると、ためらいなく、 1930  
 襲って食べるのだった。防ぎようがないのである。  
 アテナイの人びとは、間違いなく、\*三年目毎に、

籤を引き、籤が金持ちに当たろうが、貧しい人に  
 当たろうが、当たった人は息子を連れて行き、  
 ミノスにその子を差し出して、 1935  
 救うも殺すもミノスにゆだねるか、  
 ミノスの獣の意のままに貪り食わせるか、せねばなら  
 ないのである。

ミノスは深い恨みからこれを行なったのである。  
 彼の喜びはすべて息子の仇を晴らすことにおかれ、  
 命が続く限り、毎年毎年ずっと、 1940  
 アテナイの人びとを奴隷状態にすることである。

彼はこの町を手中にすると家路に就く。  
 この悪しき習慣はまことに長く続き、  
 ついに、アテナイの王\*アエゲウスは  
 自分の子テセウスを、餌食にされるために、 1945

送らねばならなくなる、籤がテセウスに  
 当たったからだ。情け容赦は存在しないのだから。  
 この可哀想な若い騎士は  
 ただちにミノス王の宮廷に連れて行かれ、  
 食べられる時が来るまで 1950  
 足枷をされて獄に投げ込まれる。

おお、可哀想なテセウスよ、泣くのは尤もなこと、  
 王の息子でありながら、このように宣告されているの  
 だから。

私にはこう思われる、冷酷悲惨の運命から救う人がい  
 れば、

あなたはその人に対して深く恩義を持つだろうと！  
 そして、もし女の人があなただけを助けるならば、 1956  
 あなたは当然その人に仕える人となり、  
 年を重ねるうちに真の恋人に当然なるだろうと！

さて、再び私が語る主題に戻ると、  
 \*テセウスは塔の暗くて非常に深い底に 1960  
 投獄されているのだが、

その塔は\*屋外便所の壁に隣接していた。  
 それはミノスの二人の娘たちが利用するもので、  
 彼女たちは\*アテナイの本通りに面する、

階上の大きな部屋部屋に住まい、 1965  
 嬉嬉として、またゆったり寛いで暮らしていた。

どうしてか分からないが、たまたま、  
 テセウスは夜陰にまぎれて嘆いていた時、

\*アリアドネと呼ばれる王の娘、  
 のみならず、その妹の\*ファイドラも、 1970  
 悲嘆の声の一部始終を聞いてしまった。

その壁の上に立って明月を見ていた時のことだった。  
 彼女たちはすぐに床に就く気になれず、  
 彼の悲しみに同情した。

王の息子はこのような牢獄に入れられ、 1975  
 餌食にされようとしている、大変気の毒に思われた。

アリアドネは品のよい妹に話しかけて、  
 言った「大好きな妹、ファイドラや、  
 あの可哀想な王子様のお声が聞こえないかい？  
 ご一族になんと悲しげに訴えていることでしょう。  
 またご自分がみじめな状態に陥っていることや、1981  
 無実であることもね。ねえ、本当に、お気の毒だわ！  
 もしあなたが同意して下さったら、きっと、  
 どのようにしてでも、あのお方をお助けするわよ」  
 ファイドラは答えた「もちろんよ、わたしも 1985  
 どのお方にも増してお気の毒に思うわ。  
 お助けするのに、わたしが進言できる  
 一番いい方法はあるわよ、  
 それはね、わたしたちが牢番をひそかに  
 呼び寄せ、急いでお話をして、  
 牢番にあのお気の毒なお方を連れて来させることよ。  
 だってもしあのお方があの怪物を退治できれば、1991  
 自由の身になれるでしょう、その他に策はないわよ。  
 あのお方の心根を試してみましょうよ。  
 つまり、武器をお持ちになれば、あのお方は、  
 ご自分の命を守るために、あの怪物と闘って 1995  
 身を守る勇気があるかどうか、試してみましょうよ。  
 あのお方が降りて行かねばならない監禁場所の中で、  
 あなたはよくご存じのように、あの獣は、斧、剣、  
 棍棒、あるいはナイフを振ることができる  
 余地も、広がりもある暗くない場所にいるのですから、  
 当然お命は落とさずにすむように、思われるわ、2001  
 もしあのお方は男なら、必ずそうなるわ。  
 そして、王子様に蠟で固めた麻糸の球も幾つか  
 作ってあげましょうよ、怪物が大きく口を開けると、  
 王子様は怪物の喉の中にそれらを投げ込むでしょう、  
 怪物の飢えをいやすためと、嘔ませないためよ。2006  
 怪物が息を詰まらせるのをテセウス様が見てとれば、  
 すぐに怪物に飛びかかって、  
 取っ組み合いにならないうちに殺せるわよ。  
 この武器を牢番に言って、 2010  
 前もって監禁場所にひそかに隠しておかせましょう。  
 監獄はあちこち曲がりくねった所がいっぱいあって、  
 進むには大変分りにくい通路になっているわ——  
 迷路のような造りになっているからよ——  
 それに対してわたしは一つ策を考えているのよ。2015  
 それは、麻糸の玉を使って、あのお方が進んだのと  
 同じ道をたどってすぐに戻れるようにしてあげること、  
 来る時に解いてきた糸に常に従いながらよ。  
 あのと退治なされば、  
 あのお方はこの恐ろしい所から逃げ去ることができ、  
 その牢番も連れて行けば、 2021  
 国許であのお方を昇進させることができるでしょう。  
 あのお方は偉大な領主のご子息ですもの。

これがわたしの進言よ、王子様がお受け下さるならね」  
 どうしてこの説明をもっとせねばならないだろうか。  
 牢番はテセウスを連れてやって来た。 2026  
 こうしてこういう事に意見が一致すると、  
 テセウスは跪いて——

「命の恩人の王女様」と彼は言った。  
 「私は死罪を宣告された、悲嘆に暮れる男、 2030  
 これをやり遂げました後、命がつまり息が続く限り、  
 あなたから決して離れることなく、  
 こうしてこのまま仕えの身に留まる所存であります。  
 無名の卑しい者として、心臓の働きが尽き果てるまで、  
 永遠に貴女にお仕えいたしましょう。 2035  
 この場所において貴女から絶大な恩顧を賜り、  
 私に飲み食いすることだけでも  
 お許しお認め下さいますならば、  
 私は故国の相続すべきものを捨てて、  
 前に申しあげましたように、貴女の宮廷の小姓となり  
 ましょう。 2040

私の暮らしのために、貴女のお気に召すままに、  
 一所懸命働きましょう。ミノス王もどのお方も——  
 私を肉眼でご覧になられたことがありますので——  
 また他のどのお方も、私を見破ることができない  
 でしょう。

私はまことに巧妙にかつ上手に振舞い、 2045  
 まことにうまくかつみずばらしく身をやつしますので、  
 この世のどなたも私を見破ることができないでしょう。  
 私の命を守るためであり、私にこのような篤い情けを  
 おかけ下さる、  
 貴女の御前にとどまるためでございます。  
 現在貴女の牢番であるここにいるこの立派な男を2050  
 私の父の許に送って、  
 この男への褒賞として

わが国の重臣の一人に取り立てるように致しましょう。  
 美しいお方様、あえて言わせてもらいますならば、  
 私は王の息子であり、また騎士でございます。 2055  
 願わくは、貴女がた、お三方お揃いで、  
 私の国に、お越し下さることが出来ますならば、  
 私は貴女がたにお伴することを望みますが、  
 その時私が嘘つきかどうかご判断いただきましょう。  
 そして、私が貴女の近習となって 2060

今ここでお仕えすることを 謙<sup>へりくだ</sup> ってお願ひしておき  
 ながら、  
 彼の地において貴女に同じ様に謹んでお仕えしない  
 ならば、

私はマルスに、恥すべき死が私に降りかかり、  
 私の朋輩はみんな死と貧困に襲われますようにという、  
 願ひをお聞き届け下さいますようお祈りします。2065

さらにお祈りします、私の死後、夜には私の魂が  
彷徨いでて、あちこち歩きまわりますように。  
裏切り者の汚名をうけ、そのために  
私の魂は彷徨って、恥をさらしますように！ 2069  
そして、たとえ貴女が忝くもお認め下さなくとも、  
もし私がもっと高い地位をずっと要求致しますならば、  
先に申し上げましたように、恥じて命を絶ちますよう  
にと！

王女様、何とぞお慈悲を！申し上げることは以上でござ  
います」

テセウスは見るからに器量好し、  
弱冠、二十三歳くらいの騎士だった。 2075  
しかし彼の容貌を誰が見たとしても、  
その苦悩の容貌には同情して泣いたことだろう。  
そのために、アリアドネは彼の申し出と態度に応じて、  
こういうふうに答えた。

「王の御子息であられ、騎士でもあられる御方、2080  
大変低い身分となってあたしの僕としてお仕え下さ  
ることなど、  
とんでもないことでございます、すべての女の恥でござ  
います。

そんなことはあたしに決して起こりませんように！  
でも貴方が身を守り、敵を騎士らしく雄々しくお討ち  
になる  
心と巧みな技のお恵みを貴方にお授け下さいますよう  
に！ 2085

そして願わくは今後、あたしとここにいます妹に対し、  
貴方が大変優しいことが分かりまして、貴方のお命を  
お救いしたことを、  
あたしが決して後悔しないということをお認め下さい  
ますように！  
でも、あたしが貴方の妻になればもっとよろしいで  
しょう。

だって貴方はあたしと同様に高貴なお生まれであられ、  
ほんの近くに、王国をお持ちですもの。 2091  
貴方を罪もないのにお命を落とすままにさせておくよ  
りも、  
また近習としてお仕えいただくよりも、もっとよろし  
いかと思います。

そのお申し出は、貴方のお家柄には相応しいものでは  
ありません。

しかし人は恐怖のためにはどんなこともしかねないも  
のです。 2095

妹について申し上げますと、もしあたしがここを出る  
ならば、  
妹はあたしと一緒に行かなければならないことになっ  
ております。

さもないと、あたしと同じ様に命を失うことになって  
おります。

貴方は\*貴方の御子息にも誠実をしめされて、  
あなたが帰国された際に妹と添わせて下さってはいか  
がかと。 2100

これがこのたびの事柄の最後の点でございます。  
誓える限りのすべてにかけて、ここでそれにお誓い下  
さいませ」

「かしこまりました、王女様、誓いを破るようなこと  
があれば、  
明日はどうか\*ミノタウロスに私は八つ裂きにされん  
ことを！

\*そしてお望みならば、その証<sup>あかし</sup>として私の心臓の2105  
血をお持ち下さい。ナイフか槍を持っておれば、  
私は血を出して、それによって誓うでしょう。  
その時まずあなたが私を信じて下さるということが分  
かりますから。

私の信仰の主神であるマルスにかけて、  
もし私は明日死ぬことなく 2110  
成功裡に闘いを終えることができますならば、  
貴女が真の証拠をご覧になるまで、  
決してこの場から逃げ去るようなことをしないつもり  
でございます。

さて、本当のことを申し上げますならば、  
貴女はご存じなかったとしても、祖国で、 2115  
私はたいそう長い間貴女を恋しておりました。  
この世に生きる生きもののうちで、  
分けても貴女にお会いすることを望んでおりました。  
私の真実にかけて誓います、貴女に誓約します。  
この七年間貴女に忠実に仕えて慕ってきました。2120  
今、私は貴女の所有物であり、貴女は私の支配者でも  
あります。

愛するお方、アテナイの公爵夫人！」

妃は彼の志操の堅固ぶりと  
真心のこもった言葉と顔つきを見てにっこり笑い、  
妹にそうっとこのように 2125

言った「ねえ、妹や、  
これからあたしたち、あなたとあたし二人共、公爵夫  
人ってことね、

そして、アテナイの王族の身分は保証され、  
二人ともこのあとお妃になれそうだわ。  
あたしたちは王様の御子息が亡くなるところからお救  
いしました。 2130

立派な理由の、特に正当な権利をお持ちの、  
高貴な男性を、持てる力の限り、お救いすることは、  
いつもの高貴な女性たちの習わしですもの。  
当然どなたもこれに対して非難なさらないと思うわ、



だから、あたしたちに悪い評判は立たないでしょう」  
 そして、この話を手短にすまずと、 2136  
 テセウスは彼女に暇乞いをし、  
 私が述べたのを聞かれたように、  
 この打ち合わせの細目は実際にことごとく履行された。  
 既に申し上げた彼の武器、彼の撚り糸の玉、彼の所要  
 物は 2140  
 看守によって、ミノタウロスが  
 棲み家にしている館の、  
 出入りする、戸口のすぐそばに置かれた。  
 そして、テセウスは死地に追いやられるのである、  
 つまりこのミノタウロスの許へと赴くのである。 2145  
 だが、\*アリアドネの教えに従って  
 彼はこの獣を打ち倒し、獣退治の勇者となった。  
 彼はこの獣を殺すと、ひそかに  
 撚り糸を頼って再び出てきて、  
 看守を通して一艘の船を手に入れ、 2150  
 妻の宝物を船に積み込み、  
 妻を乗せ、彼女の美しい妹も乗せ、  
 さらに看守も乗せ、彼ら三人と一緒に  
 夜間にその地からこっそり立ち去り、  
 彼の知己がいる 2155  
 \*オエノピアの国へ向かった。  
 其処で彼らは宴を催し、踊り、歌うのである。  
 彼は獣に殺されるところから守ってくれた  
 アリアドネを両腕に抱きしめる。  
 その地でほどなく彼は新しい船を手に入れ、 2160  
 それから、たくさんの同国人も得て、  
 別れを告げて、故国に向かって船出する。  
 そして、\*荒海の中に浮かぶ島に、  
 そこは野獣以外、しかも非常に多くの野獣以外、  
 他にどんな生き物も棲まない所だが、 2165  
 そこに彼は船を着けて上陸した。  
 その島で半日ぶらぶらしてから、  
 この地で休息する必要があると告げた。  
 部下の船乗りたちは彼の意のままに従った。  
 そして次の事柄を手短に言うと、 2170  
 妻であるアリアドネが眠っている時に、  
 なにしる妹のほうが彼女より美しかったからだが、  
 彼は妹を手にとって、船へと赴き、  
 裏切り者のように、アリアドネが  
 眠っている間に、島から抜け出したのである。 2175  
 彼は自分の国に向けて速やかに出帆する——  
 幾多の悪辣な方法を使って風が彼を吹き飛ばさんこと  
 を！——  
 さらに\*彼は父が海で溺死したことを知ったのである。  
 誓って、彼についてもう何も話したくない。  
 この不実な恋人たちよ、汝らは毒を仰いで破滅せんこ

とを！ 2180  
 ところで疲れのために睡魔に襲われていた  
 アリアドネのことに再び戻そう。  
 目覚めると彼女は悲しみでひどく心を痛めるだろう。  
 ああ、わが心は今あなたに憐憫の情を催してたまらな  
 い！  
 \*ちょうど夜明けに彼女は目を覚ます、 2185  
 そして、\*ベッドを手探り、何一つないことが分かった。  
 「ああ悲しい、あたしが世に造られてきたことが！  
 あたし裏切られた！」と言って、髪を激しくかきむし  
 った。  
 そして、海岸へ素足のまま急いで下りて行き、  
 叫んだ「テセウスさま、あたしの愛しのお人！ 2190  
 どこにいらっしゃるの？あなたにお会いできないまま、  
 あたしこうして獣どもに殺されるかもしれないのよ」  
 くぼんだ岩からこだまが彼女に返るばかりだった。  
 人影一つなかった、それでいて月は照っていたので、  
 すぐに急いで岩の上に上がると、 2195  
 沖を帆走する彼の船が見えた。  
 彼女の心は冷めていき、こう言った。  
 「野生の獣に劣るむごい仕打ち！」  
 彼は彼女をこのようにして騙したことに罪の意識がな  
 かったのか。  
 彼女は叫んだ「ああ、可哀想と思い、罪を意識して、  
 引き返して下さい！ 2200  
 あなたはまだ乗組員全員を船に乗せていないのよ！」  
 彼女はヘッドスカーフを竿に付けた。  
 彼がそれを目ざとく見つけ、  
 彼女が取り残されていることを思い出して、  
 引き返し海岸で見つけてくれることを望んで。 2205  
 だが、すべて無駄だった、彼はわが道を進んで行った。  
 彼女は気を失って石の上に倒れたが、  
 \*立ち上がり、悲しみのうちに、  
 彼が残した足跡に口づけをした。  
 それから彼女は自分のベッドに向かってこう話しかけ  
 るのである。 2210  
 「あたしたち二人をよく受け入れてくれたベッドよ、  
 一人だけでなく、二人のために答えねばなりません！  
 お前のいっそう大事な伴侶はどこへ行ったの？  
 ああ！みじめな人間たる、あたしはどのようなのでしょ  
 う？ 2214  
 だってたとえ船かボートがここにやって来たとしても、  
 （父が）怖くて自分の国に帰る勇気が出ないのです。  
 こんな状況に遭うとあたしは先を読めないのですもの」  
 アリアドネの嘆きについてもっと何を言うべきだろう  
 か。  
 そうすることは長過ぎるし、重苦しい事柄となるだろ  
 う。



\*ナッソーは\*彼女の書簡の中ですべて語っている。  
 しかし、結末まで手短かに語ろう。 2221  
 神々は彼女を可哀想に思って助けたので、  
 \*太陽が牡牛座にある時に、北冠座に  
 彼女の王冠の宝石が煌めくのがはっきりと見られるよ。  
 私はこの事についてもう語らないが、 2225  
 こういう不実な恋人はこのようにして自分の真の恋人  
 を騙すことができるのである、  
 こういう男は悪魔に痛い目に遭わされんことを！

## アテナイ ノ

## アリアドネ ノ 伝

## ココニ終ワル

7

## フィロメラ伝

## フィロメラ ノ 伝

## ココニ始マル

## 神ハ物ノ形ノ付与者ナリ

物の形の付与者、神よ、あなたはこの美しい世界を  
 お造りになられた。お仕事をお始めになる前から、  
 常にそれをあなたの御心に留めておられたのに、 2230  
 なぜ人間の恥になるものをお造りになられたのか。  
 また、そのような目的のために、そのようなもの  
 をお造りなるのは、あなたの御業ではなかったとしても、  
 なぜテレウスが生まれることをお許しになられたのか。  
 彼は愛を甚だしく偽り、愛を深く偽って誓言したから。  
 人びとが彼の名を挙げると、\*この世から第一天に至る  
 まで、 2236  
 みんな汚れて腐敗してしまうのである。  
 私に関していえば、彼の仕業はまことにひどかったか  
 ら、  
 彼の汚辱の物語を読むと、  
 目もまた濁ってきて痛むのである。 2240  
 大昔のその害毒は未だに効き目があり、  
 私が行なったテレウスについての話を  
 ご覧になる人に、その害毒は感染してしまうであろう。  
 \*テレウスはトラキアの領主で、血まみれの矢を

持って立つ  
 残酷な神マルスとは血縁の関係にあった。 2245  
 彼は幸せそうな顔付きをして、  
 \*バンディオン王の大事な美しい娘と結婚した  
 のだった。  
 \*彼女は国の花とうたわれ、プロクネと呼ばれた。  
 もっとも、\*ユノはその祝宴に出席することを好まず、  
 また結婚の神\*ヒュメナイオスもその結婚を  
 好まなかった。 2250  
 しかし、確か、\*復讐の三女神は  
 必殺の松明をもって列席をした。  
 \*悲しみと不幸の予兆である  
 梟が夜通し梁のまわりを飛び回った。  
 この祝宴は、歌に満ち、踊りもいっぱい入って、 2255  
 二週間かそのくらいの間続いた。  
 しかし、この物語を短くやり過ごすつもりである、  
 テレウスについて語るのはもう飽き飽きしているから。  
 \*彼は妻と五年いっしょに暮らした。  
 ある日妻は長い間会っていない妹に 2260  
 会いたくて、会いたくてたまらなくなった。  
 その会いたさをどう表現してよいか分からなかったが、  
 彼女は夫に願い出た、後生ですから、  
 一度だけ妹に会いに行かせて下さい、  
 すぐに戻ってまいりますから、 2265  
 そうでなくて、私が行くことができなければ、  
 あなたが迎えに行ってくださいと頼んだ。  
 これだけが彼女の毎日の頼みで、  
 言葉や態度に、貞淑な妻らしい慎ましさを湛えての頼  
 みだった。  
 \*テレウスは船団を用意させ、 2270  
 自らギリシャに出立した。  
 彼は義父に頼んで、かたじけないことだが、  
 一、二カ月の間、妻の妹、\*フィロメラを、  
 一度でいいから妻プロクネに  
 会わせる許可をいただきたいと願い出た—— 2275  
 「そしてすぐに義妹をお義父上にお返しいたします。  
 私自身が行き帰り義妹のお伴をいたし、  
 私の命と同じくらい大切にお守りいたします」  
 この老王バンディオンは、心が優しいために、  
 娘フィロメラが自分の許を離れて赴くため、 2280  
 娘にその許可を与えるに当たって、泣き出した。  
 この世で娘ほど可愛い者はいなかったのである。  
 しかしついに娘は行く許可を得る。  
 フィロメラも塩辛い涙を流して、  
 自分が大好きな姉に会いたいと、 2285  
 父の優しさにすがって懇願し始め、  
 父を両腕に抱きしめるのである。

その上、彼女は非常に若くて見目麗しかったので、  
 テレウスは彼女の美貌を見た時、  
 王族の衣装を纏う人たちが彼女を超える者は誰もいな  
 いし、 2290  
 美しさにおいて倍も恵まれていることが分かったので、  
 なにがなんでも、彼女を物にしたいほど  
 心に火のような熱い思いが注ぎ込まれた。  
 彼は狡猾に跪き、熱心に願い出たので、  
 \*ついにパンディオンはこう言った。 2295  
 「では、わたしには大事な婿殿よ、  
 わしの命の鍵を持つ  
 わが娘をお前に託そう。  
 わしの娘でもあるお前の妻によりしく言ってくれ、  
 そしてわしが死ぬまでに一度わたしに会えるように、  
 時にはあれにゆっくりする暇を与えてやってくれ」  
 \*そして実は、老王はテレウスに豪華な宴会を催し、  
 彼の供をしてやって来た部下たちにも、身分を問わず  
 そうしてやり、テレウスに立派な贈り物を与え、  
 テレウスをアテナイの本通りを通過させて 2305  
 送り、海岸まで連れて行き、  
 帰途に向かわせる。老王は\*どんな悪意も察しなかった。  
 櫂の一漕ぎ一漕ぎが船足を速め、  
 船はついにトラキアに到着し、  
 テレウスはフィロメラを森の中へ導き、 2310  
 洞窟の中にひそかに急ぎ入れ、  
 有無を言わず、  
 この暗い洞窟の中に入って居るようにと命じた。  
 それを聞くと内心おののいて、こう尋ねた。  
 「テレウス兄様、お姉様はどこにいますか」 2315  
 そう言うと彼女はさめざめと泣き  
 恐怖のために打ち震え、青ざめ、ひどく悲しみ、  
 \*まさに狼に噛みつかれた仔羊か、  
 鷲に一撃を加えられたが、  
 やっとその爪から逃れ、 2320  
 再び捕らえられはしないかと、依然として恐れ、脅え  
 ている  
 鳩のようだった。そのようにしてじっとしていた。  
 しかし他にする手だてはまったくないのである。  
 この裏切り者は無理やり行為に及び、  
 \*彼女の操を奪ったのである、 2325  
 必死の抵抗にもかかわらず、有無を言わず力づくで。  
 ほら！ここに何たる男らしい行為が、しかも正義があ  
 ったことよ！  
 彼女は声の限りに大声で叫んだ、「お姉様！」、  
 「お父様！」、「助けて下さい、上天の神様！」  
 すべて無駄である。しかもこの嘘つきの悪人は 2330  
 自分の恥を大声で口外しないようにと、  
 なおも危害を加え、

公然と悪行を行なった、  
 剣で彼女の舌を切り落とし、  
 彼女を城の中の牢に、 2335  
 ひそかに入れていつまでも、  
 自分の利用のためと自分の所有物として保有したので  
 ある、  
 そのため彼女は永遠に逃れられなかった。  
 おお無実のフィロメラよ、あなたの心を察するとなん  
 と痛ましいことか！  
 神が<sup>かたき</sup>敵を討って、あなたの願いを聞き入れて下さいま  
 すように！ 2340  
 さあもうすぐ話を終える時間である。  
 \*テレウスは自分の妻の許にやって来て、  
 妻を両腕に抱き締めて、  
 悲しそうに泣いて頭を振り、  
 お前の妹は亡くなったと誓言した。 2345  
 それを聞いてこの無垢なプロクネは非常な悲しみに陥  
 り、  
 悲痛を味わった心臓は二つに張りさけんばかりになっ  
 た。  
 このようにしてプロクネを涙に暮れさせておいて、  
 彼女の妹について語り続けよう。 2349  
 この悲しみに暮れた女性は幼少のころ織物を織ったり  
 刺繍をしたりすることができるようになつていたの  
 で、  
 織物と刺繍は昔の女性たちのする習慣だったからだが、  
 綴織を自分の製作台で織った。  
 実を言うと、彼女は十二分に  
 飲食を味わえ、思うままに衣服を持てた。 2355  
 \*書き物を読むことも十分でき、詩作もできたが、  
 ペンを用いて文字を書くことができなかった。  
 だが文字をあちこち自在に織り込むことができ、  
 そのおかげで一年が過ぎ去るまでに、  
 \*幅広い大きな荒い毛織の地に、 2360  
 アテナイから船に寄せられて連れて来られ、  
 洞窟の中に引き入れられたことを織り込み終えていた。  
 さらにテレウスが行なった所業をすべて  
 上手に織り、姉を慕ったばかりに  
 どのように扱われて苦しんだか、その話を最上部に書  
 いた。 2365  
 出来上がるとすぐに、\*一人の召使いに指輪を与えて、  
 手振り身振りで、王妃のところへ行行って、  
 この布を渡してくれるように頼み、  
 手に入れられるものは何でも与えようと、  
 手振り身振りで何度も誓った。 2370  
 召使いはすぐに王妃のところへ馳せ参じ、  
 彼女にそれを渡し、その一部始終を話した。  
 プロクネはこの布を見た時、

悲しみと怒りのために、言葉が出なかったが、  
 バッコスの寺院へ巡礼に出かけるふりをして 2375  
 妹のところに出かけ、まもなく  
 口のきけない妹が、城の中で、独りぼっちで、  
 泣きながら座っているのを見つけた。  
 ああ悲しい！ プロクネが口のきけない妹に  
 こぼす悲しみ、泣き言、悔しさといったらなかった！  
 二人はお互いひしと抱き合っている、 2381  
 二人をこうして悲しむままにさせておこう。  
 \*この話の残りを話しても仕様がな、  
 これがすべてなのだが、フィロメラはこのように扱わ  
 れたのである。  
 彼女はこの残忍な男にそれと知りながら危害を加えた  
 こともなく、 2385  
 この男から不当な仕打ちを受けて然るべき女ではな  
 かったのに。  
 できれば、男たちには用心したほうがいいよ。  
 たとえ名を失うがゆえに、  
 恥ずかしくて、テレウスのように振舞わなくとも、  
 また、人殺しあるいは悪党として身を落とさなくとも、  
 男を信頼できるのは、ほんのつかの間だから— 2391  
 たとえ私の兄弟であっても、そのことを言おう—  
 もっとも他に愛人を見つけられないような男なら話は  
 別だが。

## フィロメラ ノ 伝

### ココニ終ワル

## 8

## ピュリス伝

### ピュリス ノ 伝 ココニ始マル

\*悪い実は悪い木より生るということを、  
 もし知りたいならば、典拠のみならず 2395  
 証拠によって、それは知ることができる。  
 しかし差し当たりこれを申し上げるのは次の目的のた  
 め、  
 不実な\*デモポンについてあなたがたに語るためだ。  
 彼の父テセウスを別にすれば、  
 彼ほど愛に不実な男を聞いたことがない。 2400  
 「神様、お願いします、このような人から私たちをお守

り下さい！」  
 彼の話を耳にする女性たちはこのように祈るかもしれ  
 ない。  
 これから話の本旨へ向かおう。  
 デモポンはトロイアの町を壊滅させたので、  
 船に帆掛けて海原を越え、自分の壮大な館へと、2405  
 アテナイに向かって帰途につき、戻って来ようとして  
 いる。  
 彼は部下たちをいっぱい乗せた大型船や中型船を  
 たくさん引き連れてきたが、部下の多くの者は  
 重傷を負い、病気になり、そして憂いに満ちていた。  
 彼らは\*その包囲戦で長期間とどまっていたからだ。  
 まもなく背後から強風が彼（の船）を襲い、大雨も加  
 わった、  
 そのため帆は激しく揺さぶられ、とても耐えられそう  
 がないので、  
 彼は何よりも陸に上がりたいと思ったが、  
 嵐に激しくあちらこちらに追立てられる。  
 真っ暗になったので、どこにも向かえなかった。2415  
 おまけに舵は波に壊されてしまった。  
 そういう有様で、船は船底近くでひどく裂けて  
 しまったので、  
 どの船大工もそこを修理することができなかった。  
 夜には海は、松明が燃え盛る如く、猛烈に荒れ狂い、  
 時には上に、また時には下にと、揺さぶり彼の船をも  
 てあそぶ。 2420  
 ついに\*ネプトゥヌスはデモポンに深く同情し、  
 \*テティス、\*トルス、\*トリトンなどすべての海神も共  
 感し、  
 彼を\*ある土地に上陸させた。  
 そこは\*ピュリスが女領主で女王である地であった。  
 \*リクルグスの娘で、見目麗しく、 2425  
 \*輝く太陽を背にした花よりも美しかった。  
 デモポンはやっと海岸にたどり着くが、  
 体は弱り、疲れ切っていた。部下たちも  
 疲れから体を痛めつけられ、また飢えていた。  
 彼はほとんど死にそうになっていた。 2430  
 賢い部下たちは彼に助言した。  
 悲しみと災難から身を守るために  
 女王に助けと救援を求め、  
 どのような恵みが得られるかご覧になって、  
 この地で糧食を購入されてはと。 2435  
 彼は病んで、ほとんど死にかけていた。  
 ほとんど話すことも息をすることもできず、  
 \*ロドペアで横になって休んでいた。  
 歩けるようになると、そこの宮廷に  
 救いを求めることが最善だと思った。 2440  
 その地の人びとは彼をよく知り、彼に敬意を表した。

なにしろ、彼は、父テセウスがそうであったように、  
アテナイの公爵で領主だったからである。  
テセウスは盛時には大変な名声を博し、  
この地域一帯で彼ほど偉大な人物はいなかった  
のである。 2445

そして、デモポンはというと顔つきも体つきも父親そ  
っくりで、  
恋の裏切りまでもそうで、それは生来備わっている  
ものであり、

<sup>ルナール</sup>  
\*親狐のするところ狐の子これに習うが如く、  
彼は、学ばずして生まれながらに老練な父の習いを  
知っていたのである、\*雄鴨は捕獲されているのに、  
水際に運ばれて行くと、泳げる如くである。 2451  
節操あるピュリスは、彼に快い態度を示し、  
彼の立居振舞いや態度は、彼女を喜ばせる。  
しかし、\*愛を偽証した者どもについて書くことを、  
私はこれを書く前からもうあきあきしている。 2455  
そして、この言い伝えを語るペースを速めるためにも、  
(完結するために何とぞ私に恩寵をお授け下さいませ  
ように！)

次のように手短に進める。  
あなたがたは、憐れみの情からテセウスを  
死なせないようにした美しいアリアドネを、 2460  
裏切るテセウスの奸計ぶりの話を十分にお聞きになっ  
たから。

短い言葉で言うと、まさにデモポンも、  
同じようにして不実の父テセウスが  
歩んだのと同じ道をたどったのである。  
なにしろ体を休めてすっかり元気になると、 2465  
彼はピュリスに、あなたと結婚すると、  
こう誓ったからだ。嘘でないことを彼女に約束し、  
可能な限り彼女の所有物を彼女から盗み取った。  
彼はピュリスに対して自分の望むままに何でもするの  
である。

望めば、私は彼の行状をあれこれ洗いざらい 2470  
うまくお話しすることができるだろう。

彼は、故国へ戻るために船出しなければならないと  
告げた。

故国であなたの高い位と自分の位に相応する、  
自分たちの結婚の準備をしたいからだと説明した。  
それから彼は堂々と暇乞いをした、 2475  
そしてぐずぐず留まらずに、一ヶ月後に  
再び戻って来るつもりだと彼女に誓った。

\*その地では彼は真の領主の如くに  
命令を下し、また人びとの恭順を上手にしかも心安く  
受け入れたが、自分の船に出帆の準備をさせ、 2480  
できるだけ近い経路をとり、帰郷してしまう。

デモポンはピュリスの許に再び帰って来ないから、  
彼女は大変な辛酸を嘗めた――

ああ悲しいかな！――\*その話が伝えているように、  
彼女はデモポンに裏切られたことを知った時、 2485  
紐で首を吊って自ら命を絶った。

ところで一言二言手短に述べると、  
彼女は先ず彼に手紙を書き、戻って来て  
苦しみから自分を解放してほしいと熱心に頼んだ。  
私はもう彼について骨折って書くことに同意しかねる  
し、 2490

彼のことでペンに<sup>ひとひた</sup>一浸し分のインクも費やしたくな  
い。

彼の父と同様に愛において信義に欠けていたからだ。  
悪魔が火をつけて彼ら兩人の魂を燃やされんことを！  
でも、ピュリスの手紙について、  
一言二言、ほんの少しだが書いてみよう。 2495

\*「ああデモポン様」と彼女は言った、「あなたのもて  
なし女であり、  
大変悲しみに沈んでおります、ロドペア出身の  
あなたのピュリスは、あたしたちの間で定めた  
お約束の期間のことで、  
あなたに不平を申し上げなければなりません、  
あなたは、おっしゃった通りに、お約束を守らないの  
ですもの。 2500

あなたがあたしたちの港に錨を降ろされた時  
あなたは約束なさいました、月が一巡りする前に  
きっと、戻って来ると。

しかしあなたがここから出立なさったその日から、  
月は四度お顔をお隠しになり、 2505  
四度もこの世をお照らしになりました。

にもかかわらず、本当のことを申し上げれば、  
\*トラキアの潮流は、アテナイからの船を  
運んでまいりません。まだ船は姿を見せないのです。  
あたしや誠実な恋人は決められた日を指折り数えて待  
つように、 2510

あなたがその日を指折り数えてお待ち下さるなら、  
誓って、その日にはならないうちは、あたしは嘆きませ  
んわ」

しかし、私はピュリスの手紙を、すべて順を追って  
書くことができない、私には荷が重いようだから。  
彼女の手紙は真に長くしかも広範に渡っている。 2515  
しかし私はあちこち韻を踏んで書いたが、  
それは彼女が上手に語っていると思われるところだ。  
彼女は言った、「あなたの帆は再び雄姿を見せません  
し、

あなたのお言葉にも確かに誠実さが見られません。  
でもなぜあなたが戻ってこないのか分かっております。



あたしはあなたを気易く愛し過ぎましたもの。 2521  
 あなたは偽誓なされた神々から、  
 偽誓のゆえに応報を受けますれば、  
 あなたはその苦しみに十分耐えられないでしょう。  
 あなたの血筋を、あなたの甘いお言葉を、 2525  
 そして、あなたが無理矢理お流しになった偽の涙を  
 信用し過ぎました。あたしが嘆くのももっともなこと  
 ですわ。

あなたはそんなに見事にどうして泣けるのでしょうか。  
 そのような空涙はあり得るのでしょうか。  
 それから無垢な生娘をこのように裏切ったことを 2530  
 もしあなたが思い出すことがきつとありまして、  
 あなたにはほとんど栄誉になるはずはありませんわ！  
 これが今まであなたに生じた

最大の手柄であり、最高の名誉であることを、  
 あたしは神様にお祈りし、今までも度々お祈りしてま  
 いりました！ 2535

そして、あなたの昔の御先祖様が描かれます時、  
 人びとはご先祖様の立派さをご覧になれますが、  
 その時あなたも描かれて、人びとがそばを通る時には、  
 こう読み取って下さるように、神様にお祈りします。

『ほら！この人は心も行ないも 2540

誠実な恋人である女を、口車に乗せて裏切り、  
 ひどい目にあわせた張本人だよ！』と。  
 でも、実は、人びとはさらにもう一点についても見て  
 取りますわ。

つまり、これにおいてはあなたも父親似であるという  
 点ですわ！

だって、確かに、あなたのお父さんはアリアドネを、  
 あなたご自身があたしを騙したように 2546  
 手練手管を駆使して騙したのですもの。

もっとも、その点では立派なことではありませんが、  
 お父様そっくりよ、きっとお父様の跡継ぎですわ。  
 しかし、あなたはどんな石よりも無情であるとはいえ、  
 あなたはこうして罪深くもあたしを騙したのですから、  
 あたしの遺体がまもなく

墳墓に埋葬されることなく、アテナイの港に  
 間違いなく漂っているのを見かけるはずですわ」

そして、この手紙がすぐに送られたが、 2555

デモポンが移り気で不実であることを知ると、  
 ああ気の毒にも、彼女は絶望のあまり自殺した。  
 彼女はひどく悲しみ、自ら身のふり方を決めたからだ。  
 \*女性の皆さん、ずる賢い敵にご注意下さい、  
 今日でもこの手合いはよく見受けられるから。 2560  
 だから恋愛事においては私以外の殿方を信用しないで  
 下さい。

## ピュリス ノ 伝

### ココニ終ワル

9

## ヒュペルムネストラ伝

### ヒュペルムネストラ ノ 伝

### ココニ始マル

かつてギリシャに二人の兄弟がいた。  
 そのうちの一人は\*ダナオスと呼ばれ、  
 数多くの男の子をつくった。

女たらしたちによく見られる行為である。 2565

数多くの息子たちの中に

最愛の子が一人いた。

その子が生まれた時、ダナオスは

名前を考え、\*リュンケウスと名づけた。

ダナオスの別の兄弟は\*アエギュプトゥスと呼ばれ、  
 彼も好む限りの浮気をして、 2571

数多くの娘をもうけた。

そのなかで正妻がかわいい娘を産んだ。

その子は末娘だった、\*ヒュペルムネストラと  
 呼ばせることにした。 2575

\*その子は出生時の星位によると、  
 あらゆるよい性質に生まれついていて、  
 生まれる前から、神々の好むままに、  
 麦束の中の麦粒になることが定められていた。

\*私たちが運<sup>デスティネ</sup>命と呼ぶ、運命<sup>ザ・ウィル・デス</sup>の三女神は、 2580

ヒュペルムネストラは情け深く、節操堅く、賢く、  
 鋼の様に固く信義を守る人でなければならないと定め、  
 そういった女性に相応しくした。

金星<sup>ウェヌス</sup>が彼女に類い稀な美貌を与えたけれども、

木星<sup>ユーピテル</sup>の影響によって、彼女は程よく混ざって和らげ  
 られたので、 2585

良心、誠実さ、そして恥を恐れる心、  
 良妻の名を汚さない心も備えるようになった。  
 これらの性質は彼女がこの世に幸福をもたらすように  
 思われた。

(彼女が生まれた) その年は、赤色の火星は、  
 力が非常に弱くて、その悪の性質は衰えていた、 2590  
 金星が火星の残酷な術策を抑え込んでいたのである。  
 そのため、金星やら\*他の宮の圧迫やらで、

\*火星の毒気が薄められていたので、  
 ヒュペルムネストラはたとえ命を失おうとも、  
 あえて悪意に刃向かうということにはなかった。 2595  
 しかしながら、天がまわり、  
 彼女の運勢は\*土星の凶星相に入り、  
 後に述べるように、  
 やがて彼女は獄死するようになるのである。  
 ダナオスのみならずアエギプトゥスも、 2600  
 二人は兄弟であつたにもかかわらず、  
 —その当時血族が結婚の妨げにならなかったから—  
 ヒュペルムネストラとリュンケウスが  
 結婚することを望んだのである。  
 結婚の日取りが提案され、 2605  
 その日取りに対して完全な一致をみた。  
 結婚の衣装が作られ、その日が近づいた。  
 こうしてリュンケウスは父の兄弟の娘と  
 結婚し、お互い契りあつた。  
 松明は燃やされ、灯火が明るく灯された。 2610  
 生贄<sup>いけにえ</sup>は十分に用意され、  
 香は火に焚かれて馨<sup>かぐわ</sup>しく燻り、  
 花や葉は根からもぎ取られて、  
 花輪や丈の高い花冠作りに使われた。  
 披露宴の場には、当時の公然の習慣の如く、 2615  
 吟遊楽師の楽の音や、  
 結婚の愛の歌が満ちていた。  
 この祝宴はアエギプトゥスの宮殿の中で行われた。  
 彼は自分の屋敷内では好きなようにできる主人だった。  
 その日こうして人びとは過ごし、終わりがきた。 2620  
 友は暇乞いをして、家路についた。  
 夜が来て、花嫁は床につく。  
 アエギプトゥスは自分の部屋に急ぎ、  
 ひそかに娘を呼びにやった。  
 屋敷に入びとがみんないなくなった時、 2625  
 彼は嬉しそうな顔つきをしながら娘を打ち眺め、  
 このあとお聞きになるように、娘にこう言った。  
 「わが娘よ、わしの心の宝よ、  
 \*初めてわしのシャツが作られた日以来、  
 また\*運命を決する姉妹によってわしの運命が定めら  
 れて以来、 2630  
 愛しい娘、わがヒュペルムネストラよ、お前ほど、  
 わしの心に適うものは誰もいなかった。  
 父であるわしが、ここでお前に言うことを注意して聞  
 いてくれ、  
 これからはお前より優秀な知恵者の言葉に従って行動  
 してくれ。  
 娘よ、第一に、わしはお前が可愛くてたまらぬ、 2635  
 世界中探したって可愛さにかけてはお前の半分に及ぶ

者はいない。  
 わしはこの冷たい月下にある全財産に代えても  
 お前のためにならないことをお前に言いつけたくない。  
 わしの言わんとすることを今すぐに、  
 こういう風にして、きっぱりと言っておこう。 2640  
 もしお前はわしがこれから言うようにしないなら、  
 すべてをお造りになった神にかけて、亡き者になると  
 思いなさい！  
 手短に言えばじゃ、お前はわしの言い付けに同意し、  
 言い付けに従って動かなければ、お前が生きているう  
 ちは、  
 わしの屋敷から絶対逃れられないのじゃ。 2645  
 これはわしの固い決意だ、肝に銘じておきなさい」  
 ヒュペルムネストラは目を伏せて、  
 \*緑のポプラの葉のように震えた。  
 顔色は死人のように、見るも無残に灰色になって、  
 言った「お父様、お父様のご意志を、 2650  
 わたしがうろたえることがなければ、  
 神にかけて、わたしの力に应じて、果たしましょう」  
 「わしは特別扱いせぬ」と彼は言って、  
 鋭い剃刀のようによく切れそうなナイフを取り出した。  
 「これを見えないように隠しておきなさい。 2655  
 夫がベッドにやって来て、眠ったなら、  
 眠っている間に、やつの喉を真二つにかき切りなさい。  
 わしは夢の中で告げられたのじゃ、  
 甥によってわしは殺されることになる。  
 だがどの甥か分からぬ、それゆえ確かめたいのじゃ。  
 お前がいやだと言うなら、誓った神にかけて、 2661  
 申したように、わしら親娘の間で喧嘩が起ころう」  
 ヒュペルムネストラは意識を失いそうになったが、  
 その場を大過なくやり過ぎて立ち去るために、  
 父の言う通りにするのである、全く情け容赦はなしだ。  
 さらに彼は徳利型のびんを取り出して、 2666  
 言った「このびんから一、二杯、それとも三杯、  
 夫が休む時に飲ませなさい。  
 夫はお前の望む限りの間、眠りつづけるだろうよ。  
 麻酔薬とアヘンが非常に強く効くからじゃ。 2670  
 さあ行きなさい、座を外し過ぎていると花婿に思われ  
 ないように」  
 花嫁は出て来る、娘たちがよくやるように、  
 まったく取り澄ました顔つきをしながら、  
 歓楽と歌にあふれる部屋へと導かれるのである。  
 話が長くなり過ぎるといけないから、手短に言うと、  
 このリュンケウスと彼女はベッドに赴くと、 2676  
 付き人たちはみんな急いでドアから出て行った。  
 夜は更けていき、リュンケウスは眠りに落ちた。  
 彼女は夫を優しく思いやって泣き出すのである。

\*起き上がると、ひどく身を震わせる、 2680  
 \*さながら西風ゼフィルスに震える木の枝のように。  
 だが、\*アルゴスの町全体はしんと静まりかえっていた。  
 \*彼女は今や霜以上に冷たくなっていく。  
 というのは哀れみが彼女の心をひどく<sup>さいな</sup>苛み、  
 死の恐れが大変な悲しきみをもたらし、 2685  
 そのためにひどく悩み苦しんで三度倒れたのである。  
 彼女はなおも立ち上がり、あちこちよろめき歩き、  
 自分の両の手をしっかりと見るのである。  
 「ああ！ この手は血まみれになるのでしょうか。  
 \*わたしは汚れない女です、しかもわたしの性質から  
 見て、 2690  
 そしてわたしの外見や着ているものから見ても、  
 この両手は、人の命を奪うために  
 ナイフを使うように造られてはいません。  
 一体わたしはナイフを持って何をしなければならない  
 の？  
 この喉を真二つに切りましょうか。 2695  
 その時は、ああ、わたしは血を流し、破滅するわ！  
 そうすればこの仕事は終わるはず。  
 さもないと夫かわたしかどちらか、絶命は避けられな  
 いわ。  
 そうだわ、わたしは彼の妻だもの、  
 それにわたしには信義があるわ、そのうえ 2700  
 裏切り者として恥辱を受けながら生きるよりも、  
 誠実な妻らしく死ぬほうがいいわ。  
 いずれにしても、必ず、

夫の目を覚まさせ、起こして、  
 夜が明けないうちに、\*下水溝伝いに逃してやりましょ  
 う」—— 2705  
 そう言ってさめざめと泣いて涙で顔を濡らすのである。  
 両腕に夫を抱いて、  
 夫を揺すり、そっと起こすのです。  
 彼女は夫に事情を告げ、手助けすると、  
 夫は階上の部屋の窓から飛び降りた。 2710  
 リュンケウスは敏捷で、足が速かったので、  
 妻から一目散に走り去って行った。  
 この哀れな妻は——ああ悲しいかな！——か弱く、  
 助けもないので、遠くへ逃げる前に、  
 残酷な父によって捕らえられた。 2715  
 ああ、リュンケウスよ、なぜお前はこんなにも無情な  
 のか。  
 お前は妻を連れて、一緒に逃げることを  
 なぜ思いつかなかったのか。  
 彼女は夫が走り去るのを見てとり、  
 自分は速く走ることができず、 2720  
 付いて行けないと分かると、覚悟してすぐに座り込ん  
 だ。  
 ついに彼女は捕らえられ、牢獄に囚われの身となった。  
 \*この話はこの結論として——と言われている。

[以下未完]

## 注

(注の見出しの綴字は原文の綴字を示し、イタリックスで表した。本訳では注釈当該箇所の上にアステリクス\*を記した)

### 5 ルクレティア伝

チャーサーは典拠として、古代ローマの第一流の詩人オウィディウス Ovid (Ovidius)と、古代ローマの歴史家リウィウス Livy (Livyus) の名を挙げている。ルクレティアについて書いているのは、オウィディウスの作品では『祭暦』*Fasti* 2: 685-852 であり、リウィウスでは『ローマ建国以来の歴史』*Ab urbe condita libri* 1: 57-59 である。しかし、語り口はオウィディウスの方に従っている。リウィウスを原拠として利用した形跡は明確には見られない。

\* 1681 最後の王タルクィニウス *The laste kyng Tarquinius* ローマの最後の王タルクィニウス・スペルプス Tarquinius Superbus のこと。後に出てくるルクレティアの凌辱者タルクィニウス・セクストゥスはその子。ルクレティアの凌辱は抑圧されていたローマの人びとの限度を超えたものとなり、彼らはタルクィニウス一族全員を追放し、それとともに紀元前 510 年に王制がくつがえり、共和制になる。初期のローマでは、伝説上、紀元前 753 年から約 250 年間に 7 人の王が統治したとされる。伝説上の 7 名の最初の王はロムルスで、最後がタルクィニウス・スペルプスである。

\* 1683 オウィディウスとティトゥス・リウィウス *Ovyde and Titus Lyvius* オウィディウス (Publius Ovidius Naso) (43BC-AD17?) (英名 Ovid) は古代ローマの詩人。紀元後 8 年原因不明の理由により皇帝アウグストゥスによりローマから黒海近くのトミに流され、客死した。物語作家として後世に影響を与えた。主作品に『変身物語』、『名婦たちの書簡』、その他『愛の技法』、『愛の治療法』、『祭暦』などがある。

ティトゥス・リウィウス (Titus Livius) (59BC-AD17) (英名 Livy) は古代ローマの歴史家。ローマ創建からネロ・クラウディウス・トルスス (9BC) までを記述した 142 巻 (現存 35 巻) にわたるローマ史の記念碑的著作 (上述した) 『ローマ建国以来の歴史』は、18 世紀にいたるまで歴史書の基本であった。

\* 1685 ルクレティア *Lucretse* Lucretia. 紀元前 6 世紀後期の人。執政官ルクレティウスの娘。ローマの貴族で軍の士官ルキウス・タルクィニウス・コラティヌスの美貌の妻。『善女列伝』(1) F257, G211 注参照。

\* 1688 異教徒たち この頃のローマ世界はまだキリスト教に改宗されていない。だからローマ人は異教徒である。



- \*1689 われらの言い伝え *our legende* をこう訳した。それは通常『黄金伝説』 *Legenda aurea* (大部分は歴史(的記録)にない聖者たちの生涯を収集した13世紀の本)とされているが、『ゲスタ・ロマノールム』 *Gesta Romanorum* のことかもしれないという意見もある。その書の135話においてルクレティアの物語の原拠としてアウグスティヌスの名が当てられている。
- \*1690 大聖アウグスティヌス *The grete Austyn* 聖アウグスティヌス St. Augustine (354-430)のこと。アウグスティヌスは初期キリスト教の西方教会最大の教父で、正統的信仰教義の完成者として列聖された。『告白』や『神の国』の著者として有名。アウグスティヌスは『神の国』1.19において、この物語を語り、ルクレティアについて論評している。彼女の高潔を認めているが、彼女の自殺については非難している。チョーサー自身が聖アウグスティヌスのこの注釈を見た、ということを示しているようである。
- \*1695 アルデア *Ardea* イタリア中部、現在のローマ南東部にあった古代都市ラティウムのルトイウリの首都。この行よりチョーサーはオウィディウス『祭暦』2:721-852に従う。
- \*1705 コラティヌス *Colatyn* Collatinus. タルキニウス・セクストゥスの従兄弟、ルキウス・タルキニウスのこと。オウィディウスの説明では *surgit, cui dederat clarum Collatia nomen* (『祭暦』2:733)〈コラティアの町が名高き名を与えた王子が立ち上がり、言いました。〉(高橋宏幸訳『祭暦』国文社)として名前を挙げていない。しかし、チョーサーはコラティアの町の名からこの名前を容易に推測できたのかもしれない。コラティアの町はローマの東15キロほどのところにある。タルキニウス・スペルプス王の父で先々代の王であるタルキニウス・プリスクス王がコラティアの町を奪取した時、甥のエグリウスを駐留指揮官とした。そこからエグリウスの息子がコラティヌスの副名を得たのである。
- \*1707 『祭暦』2:734〈言葉はいらない。事実を信じてくれ〉(高橋宏幸訳)参照。
- \*1710 今夜ローマに出かけて コラティヌスはローマでなく、コラティアに住んでいた。実際は、ローマの士官たちは、まずローマに行き、ローマでタルキニウス家の女性たちが宴を張っているのを見て、その後コラティアへ行った。チョーサーは『祭暦』2:735-41と785に含まれた意味を誤解したのかもしれない。ガウアーGowerも『恋する男の告解』7:4911-12において、コラティアをローマの門の名と解しながら、同じ誤解をしていることを示している。
- \*1717 『祭暦』2:738〈戸口にはひとりも番人がいません〉(高橋宏幸訳)参照。
- \*1722 我らの本 オウィディウスの本のこと。おそらく『祭暦』をさす。彼は『祭暦』2:742において毛糸について触れているから。〈褥の前には籠に入れた柔らかな羊毛がありました。〉(高橋宏幸訳)
- \*1730 『祭暦』2:751-52〈でも、私のあのひとは向こう見ず、剣を抜いてどこへでも突撃してしまうのだから〉(高橋宏幸訳)参照。チョーサーは誤解したようである。
- \*1773 この格言のものは『祭暦』2:782〈決断ある者を運命も神も助けて下さる〉(高橋宏幸訳)である。『トロイルスとクリセイデ』4:600-601、『カンタベリー物語』「莊園管理人の話」4210参照。
- \*1778-86 オウィディウスにおいてもリウィウスにおいても、タルキニウスは公然と家に入り、ルクレティアに迎えられる。ガウアーにおいても同様である(『恋する男の告解』7:4920-39)。チョーサーはルクレティアの無邪気を強調するために、ここを故意に変えたといわれる。
- \*1812-26 オウィディウスは〈女心は世評への恐れの前には破れ、屈服してしまいました〉(高橋宏幸訳)(『祭暦』2:810)というだけで簡単に片づけている。
- \*1839-49 これらの行は正確にはオウィディウスの筋と一致しない。スキートは、1847-49行はむしろリウィウスに近い、と言っている。また『恋する男の告解』7:5048-57参照。
- \*1841-42 『トロイルスとクリセイデ』3:114に、〈石のような心にも同情を引いたことであろう〉(笹本訳)という、似たような表現がある。
- \*1847-70 『祭暦』2:829-52参照。
- \*1862 ブルートゥス *Brutus* ルキウス・ユニウス・ブルートゥスのこと。彼は紀元前6世紀のローマの政治家で、ローマの共和制の基礎を築いた。ブルートゥスが執政官だった紀元前509年、スペルプスの息子セクストゥス・タルキニウスがルクレティアを凌辱したという恥ずべき事件を起こしたことなどによって、タルキニウス一族を追放した。ここにローマは共和制を宣言し、王制は7代にして終わる。
- \*1871-72 ここのルクレティアの列聖について、この列伝の構想に従って行なっているだけではない。オウィディウスは「タルキニウス・スペルプス王の逃亡」日として記念されている2月24日に定めて、『祭暦』においてルクレティアの物語を語っているのである。これによって、彼女をキリスト教の聖女のように、この日を彼女の聖日とすることを、チョーサーは思いついたのであろう。
- \*1872 ティトゥス *Tytus* ティトゥス・リウィウスのこと。上掲注1683参照。
- \*1879-82 シリア・フェニキアの女性のことを述べているといわれる。「マタイによる福音書」15:28。

## 6 アリアドネ伝

- \*1886 黄泉の国の裁判官、クレタ島の王、ミノス *Mynos*, Minos チョーサーは、アリアドネの父であるクレタ島の王ミノスを、黄泉の裁判官ミノスと同一人物と誤解したか、あるいは2人を1人に統合したか、そのどちらかにしている。ミノスとはクレタ島の王たちの王位継承者の称号であった。最初のミノスはユピテルとエウロペとの間の息子で、ラダマンデュスおよびサルペドーンと兄弟であり、黄泉の裁判官になった。ユピテルの孫の第二のミノスはパシファエの夫で、アンドロゲオス、アリアドネそしてファイドラの父であった。アンドロゲオスがアテナイで殺されると、ミノスはアテナイを攻めた。クレタ島はエーゲ海南部の島。ギリシャ最大の島で、古代エーゲ文明の中心地。
- \*1898-99 チョーサーはアンドロゲオスが哲学の高い学識のために殺されたという伝説を利用している。一方、ギリシャ伝説によると、アンドロゲオスは、全アテナイ祭の競技会において彼の競争手をすべて打ち負かしたので、アエゲウスの妬みを買って、殺された。哲学に優れていたからではないとされる。ガウアーはどちらかといえば高い学識を誇ったためとしている(『恋する男の告解』5:5234-45)。
- \*1902 アルカトエ *Alcathoe* アテナイから26マイル離れたところにある、ギリシャのコリントス地峡メガリスの都市メガラの城塞。アルカトエは創設者アルカトウスの名にちなむ。



- \* 1902-21 チョーサーは『変身物語』8: 6-151 の材料を要約している。
- \* 1908 ニソスの娘 *Nysus daughter* スキュラ *Scylla* のこと。ミノスへの愛のために、包囲された自国の都市を守る魔力のある父親（メガラ王ニソス）の紫色の髪を切つて裏切り、ミノスを助けて彼の許に走ったが、ミノスは彼女の娘らしくない行動を恐れ、彼女を溺死させた。神々は彼女を憐れんで白鷺に変えた。チョーサーはスキュラに対して共感を覚える性格にしている。『鳥の議会』294、『トロイルスとクリセイデ』5: 1110 参照。
- \* 1922-47 ここでチョーサーはオウィディウスの筋からそれる。ガウアーもそうしている、『恋する男の告解』5: 5254-5314 参照。チョーサーは他の典拠を利用したようである。その典拠については、ボッカツチョとかマショー *Machaut*、あるいは *Ovide moralisé* などである。
- \* 1925 毎年 *From yer to yer* ギリシャ伝説ではミノス王は償いとしてアテナイに毎年男女7人ずつの若者の犠牲を求めたとも、あるいは9年目毎に男女七人ずつの若者を求めたともいわれ、第3回目の時にテセウスが自発的に志願して怪物をみごとに退治した。
- \* 1928 一匹の怪物 半人半牛（人身牛頭）のミノタウロスのこと。名工ダイダロスがクレタ島に迷宮ラビュリントスを造り、ミノス王がミノタウロスをそこに閉じ込めた。ミノス王の妃パシファエは牡牛と不自然な肉欲にふけり、その結果ミノタウロスが生まれたとされる。それゆえミノタウロスはアリアドネとファイドラの異父兄弟である。『変身物語』8: 155-68 参照。
- \* 1933 3年目毎 ヒュギーススは7人の子どもが毎年送られたといい、ガウアーは9人が毎年送られたといっている。チョーサーは1925行（原文では1926行）において「毎年」といっているのに、ここでは「3年目毎」となっている。チョーサーはオウィディウス（9年目ごとに送ってこられる三度目の人身御供がついに怪物を退治してしまった）（田中・前田共訳）『変身物語』8: 171）を読み違えたことから3年の期間ということになったのかもしれない。
- \* 1944 アエゲウス *Egeus* *Aegeus*. パンディオンの子でアテナイの王、テセウスの父。クレタの王子アンドロゲオスがアテナイで殺されると、父ミノスは息子の仇を討つためにアテナイを攻めた。そしてクレタの迷宮に閉じ込めている半人半頭の怪物ミノタウロスの餌食にするために、アテナイの若い男女を貢納するよう強要した。ある年アエゲウスの息子テセウスは犠牲となる若者たちの中に入ることにになり、彼らとともにクレタ島に赴き、クレタの王女アリアドネの援助を得て、ミノタウロスを殺し、帰途についた。しかしテセウスは、ミノタウロスを退治して無事帰還するならば、船の黒い弔帆を白い帆に変えたと、約束していたことを忘れ、黒い帆を掲げていた。アエゲウスは黒い帆を見て、息子は死んだと思い、海に身を投げて死んだ。その海は現在アエゲウス *Aegeus* の名にちなんで、エーゲ海 *the Aegean Sea* と名づけられている。また、アエゲウスの振舞いについて、『変身物語』7: 402-4、『騎士の話』2838、2905 参照。
- \* 1960-2122 チョーサーはボッカツチョの『テセウス物語』*Tesida* 3: 1-175, 4: 1-129 のパラモンとアルシーテの物語に従っているように思われる。
- \* 1962 屋外便所 *foreyne* をこう訳した。テセウスが投獄された地下牢は便所塔 *garderobe tower* にあって、便所と隣り合っていたのだろうか。王女たちの階上の部屋の外に便所塔が付いていて、汚物は塔の穴を通して落ち、地下に貯められたのであろうか。この訳の底本である *The Riverside Chaucer* の注ではこう説明している。Theseus is apparently imprisoned in a privy (foreyne) “that may have served also as the pit for the garderobe tower, the upper part of which belonged to the princesses’ suite. ...” ここはこの注釈を参考にして訳した。
- \* 1964 アテナイの（本通り） ここを含めて『善女列伝』の12の写本のうち10の写本は(the mayster-strete) / Of Athenes となっている。つまりテセウスはアテナイの塔に投獄されているようになっているが、ギリシャ伝説では、テセウスはその時クレタ島に幽閉されていて、アテナイにいないから、アテナイでの投獄は正しくない。ここはチョーサー自身の間違いと考えられている。ボッカツチョの『テセウス物語』ではアテナイで幽閉されているようになっている。その影響によるらしく、チョーサーはそれを使っているのではないかとと思われる。
- \* 1969 アリアドネ *Adryane* *Ariadne*. クレタ島の王ミノスとパシパエの娘。『善女列伝』(1) F268, G222 注参照。なお、*Adryane* は *Adriane* の綴字の異形であり、*Adriane* は *metathesis*（音位〔字位〕転換）による古フランス語の異形である。この名は、チョーサーの作品において冒頭の位置ではまったく見られない。語中位置では10回見られ、末尾の押韻位置では5回あらわれる。
- \* 1970 ファイドラ *Phedra*, *Phaedra* アリアドネの妹。クレタ島の王ミノスとパシパエの娘。テセウスの妻。義理の子 hippolytus に恋したが拒絶されたために、彼を夫に讒訴し、自殺した。
- \* 2063 マルス *Mars* ローマ神話の軍の神。ギリシャ神話のアレスに当たる。
- \* 2099 貴方の御子息 hippolytus *Hippolytus* のこと。この提案はテセウスが23歳にすぎなかったという2075行目の記述と一致しないように思われる。スキートはアリアドネが冗談を言っていると考えた。しかしテセウスはもう年端のいかない息子を持つだけの年齢に達しているし、年端のいかない若者の婚約に対して、多くの中世的自由裁量があり、こういう特別な婚約に対しても中世的な自由裁量があった。
- \* 2104 ミノタウロス *the Mynotaur, the Minotaur* 上掲注 1928 参照。
- \* 2105-8 人の身体の一部をかけての誓言は中世ではありふれたことだった。人の血（液）をかけた誓言は特に強力だった。血は生命にかかわるからである。
- \* 2146-49 オウィディウス『名婦たちの書簡』10: 71-72, 103. オウィディウス『変身物語』8: 172-73 参照。
- \* 2156 オエノピア *Ennopye* アエギナ *Aegina* 島の古名。サロニコス湾のアテナイ近くにある島。
- \* 2165 荒海の中に浮かぶ島 ナクソス *Naxos* 島だといわれる。ナクソス島はエーゲ海南部のキクラデス諸島最大の島。テセウスがこの島にアリアドネを置き去りにしたということは、アリアドネをこの島に捨てるためにわざわざ遠回りしてアテナイに帰ったことになる。
- \* 2178 彼は父が海で溺死したことを知った チョーサーはテセウスのよく知られている黒い帆の出来事については語っていない。前掲注「アエゲウス」の項参照。
- \* 2185-2217 『名婦たちの書簡』10 に従っている。
- \* 2186 上掲書 10: 12 より。
- \* 2208-09 上掲書 10: 53-54 の誤訳。
- \* 2220 ナッソー *Naso* 古代ローマの詩人オウィディウス・ナッソーのことで、『名婦たちの書簡』の作者。上掲注 1683 と『善

女列伝』(1) G305 注参照。

\* 2220 彼女の書簡 *hire Epistel* 『名婦たちの書簡』10の〈アリアドネからデセウスへ〉宛てた書簡のこと。

\* 2223-24 バッコス<sup>1</sup>はアリアドネを憐れみ、求愛し、彼女をヘラクレス座の星として天に投げ上げ、その冠を Corona Borealis, the Northern Crown (北冠座)として据えた(『祭暦』3: 451-516、『変身物語』8: 176-82)。アリアドネの王冠は牡牛座 Taurus になく、北冠座(牡牛座とヘラクレス座との間にある小星座)にある。4月の夜、太陽が牡牛座にある時、北冠座は輝きを増して特にはっきりと容易に見られるということを、チョーサーは言っているのかもしれない。

## 7 フィロメラ伝

\* 2236 この世から第一天に至るまで 「この世」とは地球のこと。プトレマイオスの宇宙体系によれば、地球は宇宙の中心とみなされた。天球層の順は、ここのように最も外側の天球層から中に向かって数えられる時もある。『トロイルスとクリセイデ』3: 2のように地球から外に向かって数えられる時もある。「第一天」とは原動天のことであろう。プトレマイオス体系では最も外側の天である。

\* 2244 この時点からオウィディウスに基づく説明が始まる。

\* 2247 パンディオン王 *Kyng Pandion* アテナイの伝説上の王 Pandion のこと。

\* 2248-54 『変身物語』6: 428-32 参照。

\* 2249 ユノ *Juno* ユピテルの妻で、ローマ神話最大の女神 Juno。女性(特に結婚生活)の保護神。ギリシャ神話のヘラに当たる。

\* 2250 ヒュメナイオス *Imeneus Hymenaeus, Hymen*。ギリシャ神話の婚姻の神。ディオニュソスとアプロディテーとの間の子。結婚式の時、花婿と花嫁を従えて列の先頭を歩く、松明を持った美少年の姿に表される。もとは祝婚歌の意。しかし後に結婚の松明を持つ美少年の神として擬人化された。

\* 2251 復讐の三女神 *the Furies* 犯罪人を追い詰める復讐の女神たちだったが、後の詩(例えばオウィディウスの詩)において3人に限定され、「復讐の三女神」と名づけられた。

\* 2253-54 悲しみと不幸の予兆である／梟 梟が鳴くと伝統的に死の前兆とみなされ、梟は凶兆の鳥とみなされた。『トロイルスとクリセイデ』5: 319-20 参照。

\* 2259-67 『変身物語』6: 438-42 参照。

\* 2270-78 上掲書 6: 444-50、475、483 参照。

\* 2273 フィロメラ *Philomene Philomela*。ここでは Philomene と綴られている。Philomena と綴られることもあるが、この綴字は中世ではよく使われた綴字である。なおフィロメラはナイチンゲールの詩語。

\* 2295-98 『変身物語』6: 495-501 参照。

\* 2302-7 上掲書 6: 488-89 〈王宮の晩餐の用意はととのえられ、バックスの恵みが黄金の杯にあふれた〉(田中秀央、前田敬作訳) 参照。

\* 2307 どんな悪意も察しなかった 上掲書 6: 510 〈不吉な予感に胸さわぎをおぼえて慄然としたのであった〉(田中秀央、前田敬作訳) 参照。

\* 2318-22 脅えた仔羊や鳩のイメージは上掲書 6: 527-30 に由来する。

\* 2325-26 「バースの女房の話」887-89 〈するとすぐに、彼は、乙女が全力で抵抗したにもかかわらず、力づくで、乙女の純潔を奪ってしまいました〉(笹本訳) 参照。

\* 2342-49 上掲書 6: 563-70 参照。

\* 2356-57 ここには中世のレディの教育について興味深い状況が示されている。当時、機織りは貴種の女性のふさわしい行為だったが、書くことは雇われた聖職者の仕事であつたらしい。当時の身分の高い女性は正式な教育を受ける機会がなかった。だが、文字を読むことは普通にできたが、書くほうとなると話は別だった。

\* 2360-62 上掲書 6: 576-78 〈たくみにたて糸をしかけ、白糸の地に緋色の文字を織りだして、この非行を書きあらわした〉(田中秀央、前田敬作訳) 参照。

\* 2366 一人の召使い *a knave* 2367 行 him 伝統的に召使い(使者)は女性であつた。女性の方がよりふさわしかったのである。しかし、チョーサーは男性にしている。

\* 2384 この後のテレウスの子どもを殺して料理してテレウスに供するという姉妹の復讐話については、ここの話に即さないからチョーサーは省略している。この後『変身物語』では3人は神々によって鳥に変えられた。フィロメラはナイチンゲールに、プロクネはツバメに、テレウスはヤツガシラに変身した。

## 8 ピュリス伝

\* 2394 悪い実<sup>2</sup>は悪い木より生る 「マタイによる福音書」7: 17 〈すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ〉(新共同訳聖書) 参照。また「修道士の前口上」1956には〈ひ弱な木から貧弱な若枝しか伸びぬ〉(笹本訳)とある。

\* 2399 デモボン *Demophon Demophoön*。デセウスとファイドラとの間に生れた子。G 218 注参照。デモボンはトロイア戦争に出征したとされる。

\* 2410 包囲戦 トロイア戦争のこと。

\* 2421 ネプトゥヌス *Neptune* ローマ神話の海神。ギリシャ神話のポセイドンにあたる。ギリシャ人に敵意を持つ神で、トロイアからギリシャに戻るギリシャ人の船を、嵐で悩ましつづけた。

\* 2422 テティス *Thetis* Thetis。海の女神。海神ネレウスの50人の娘の一人、ペレウスの妻でアキレウスの母。

\* 2422 トルス *Thorus* Riverside 版では Thorus で、Robinson 版やその他ではコルス Chorus である。海神のようだが、この名の海神はいない。不詳。

\* 2422 トリトン *Triton* Triton。ギリシャ神話の海神ポセイドンの子で、ほら貝を吹いて波を鎮めたり波を立てたりする半人半魚の神。『名声の館』1596 参照

\* 2423 ある土地 トラキア Thrace である。トラキアはバルカン半島東部の古代の地域。

\* 2424 ピュリス *Phyllis* Phylis。トラキアの王女。『善女列伝』(1) F264, G218 注参照。

- \* 2426 リクルグス *Ligurges* Licurgus. ボッカッチョによるとトラキアの王で、ピュリスの父となっているが、ここでは重要な役を演じない。
- \* 2425-26 「騎士の話」1035-36〈緑の茎に咲く百合よりも見目麗しく〉(笹本訳) 参照。
- \* 2437 ロドペア *Rodopeya* 今のロドペ Rodope 山地(ブルガリア南西部とギリシャの境の山脈)近くのトラキアの国。
- \* 2448-51 狐と雄鴨の譬えは、行動の根拠には遺伝本能があることを強調している。「女子修道院付き司祭の話」3280-81、「食料仕入れ係りの話」160-86、『トロイルスとクリセイデ』1: 218-24、『薔薇物語』14023-99 参照。
- \* 2450 雄鴨 *drake* a male duck のこと。宮田訳では「カゲロウ」となっている。drake を a drake fly と解釈したようだ。
- \* 2454-55 詩人チャーサーはこの列伝を書き続けることにうんざりしていたという証拠として、しばしば引用される行の一つである。
- \* 2478 その地 トラキアのロドペアのこと。
- \* 2484-86 ピュリスが首を吊って自殺するという話は『名婦たちの書簡』2: 131-42 に由来しない。
- \* 2496-2554 ここからずっと『名婦たちの書簡』2 に従う。
- \* 2508 トラキアの潮流 *the strem of Sytho* をこう訳した。Sytho はトラキアのこと、彼女の父シトン Sitho はトラキアの王だったから。
- \* 2559-61 聴衆の淑女たちに呼びかけている類似表現は『トロイルスとクリセイデ』5: 1784-85 や『アネリダとアルシーテ』197 に見られる。

## 9 ヒュペルムネストラ伝

- \* 2563 ダナオス *Danaos* Danaus. アルゴスの王ダナオスにはいろいろな女から得た 50 人の娘がいた。彼の双子の兄弟アエギュプトゥスには 50 人息子がいた。彼らは従姉妹の 50 人の娘たちにプロポーズした。ダナオスは甥たちを恐れていたが、ダナオスは同意した。けれども、ダナオスはそれぞれの娘に対し、初夜のベッドで夫を殺すように命じた。ヒュペルムネストラ以外のすべての娘たちは父親の命に従った。ヒュペルムネストラは夫リュンケウスの命を助けた。夫は彼女を後に残して逃げ、彼女はダナオスに幽閉された。リュンケウスは後にダナオスを殺した。
- チャーサーは父親と子供たちを取り替えている。ダナオスには多くの息子たちがいて、そのうちリュンケウスを最も愛しているようにしている。それはチャーサーの発案のように思われる。
- \* 2569 リュンケウス *Lyno* Lynceus. リュンケウスは、アエギュプトゥスの 50 人の息子の一人。従妹のヒュペルムネストラと結婚したが、ダナオスはリュンケウスを信頼しておらず、ヒュペルムネストラに殺すように命じたが、ヒュペルムネストラは彼の命を助けて逃した。
- \* 2570 アエギュプトゥス *Egiste* Aegyptus. チャーサーではアエギュプトゥスが娘たちの父親になっている。ちなみにエジプト Egypt という名称は、Aegyptus の名にちなんで命名された。
- \* 2574 ヒュペルムネストラ *Ypermystre* Hypermnestra アルゴスの王ダナウスの 50 人の娘の一人。『善女列伝』(1) F268, G222 注参照。
- \* 2576-99 出生時の星位はチャーサーが考え出したものである。ウェヌス(金星)はユピテル(木星)と合になっていた。マルス(火星)はウェヌス(金星)と宮(金牛宮や天秤宮)の圧迫によって弱められていたが、サトゥルヌス(土星)は凶星相にあった。つまり金星と木星は「善意を持った」惑星で、火星と土星は「悪意を持った」惑星である。もっとも火星の悪影響は金星の影響によって軽減されていたけれども。
- 要約すると、ウェヌス(金星)の影響はヒュペルムネストラの美しさの因であり、ユピテル(木星)との合は彼女の優しさと貞節を生み、サトゥルヌス(土星)の好ましくない位置によって最終的に彼女の死が引き起こされたのである。
- \* 2580 運命の三女神 *the Wirdes* これは(中世)キリスト教的な言葉である。つまり the Fates (運命の三女神)のこと。クロト、ラケシス、アトロポスが三女神である。クロトは誕生を支配し、糸巻棒から人間の命の糸を引っ張り、ラケシスは命の糸を紡いで、糸(命)の長さを決め、アトロポスは命の糸をはさみで切り離した。古英語 *wyrd* は fate を意味した。中英語 *wirdes* (*wierdes*)に *wird(e)*, *werd*, *wierde* の複数形で、時タローマ神話の *Parcae* の訳として使われた。ギリシャ神話では *Moirai* (ラテン語 *Moirae*) に当たる。運命 *Destine* *Destiny*. をこう訳した。これも(中世)キリスト教的な言葉である。チャーサーの *Destiny* は世の連動した出来事のこと、*Wirdes* と同じで、物事の習いであり、浮き沈みに満ち、究極的に神の指導下にある。
- \* 2592 他の宮 巨蟹、天秤そして金牛の諸宮のこと。
- \* 2593 火星は毒気が薄められていた 昔の占星術によれば、火星は磨羯宮にある時その勢いが振わないとされていた。ヒュペルムネストラの生まれた時、火星はいずれかに坐していたのである。
- \* 2597 土星の凶星相 土星サトゥルヌスの悪影響についてチャーサーは「騎士の話」の 2454-69 において長々と語っている。2597-99 行の土星サトゥルヌスと投獄との関連についても「騎士の話」2457 参照。
- \* 2629 初めてわしのシャツが作られた日以来 「わしの誕生の日以来」という意味であろう。これに似た通俗的表現は「騎士の話」1566〈私の死は産着が作られる前から〉(笹本訳)にもある。
- \* 2630 運命を決する姉妹 *the fatal systren* 運命の三女神 *the weird sisters* (= the Fates) のこと。昔のギリシャ人たちやローマ人たちは、three *Parcae* つまり three Fates (運命の三女神) がいて、彼女たちは勝手気ままに万人の誕生と生と死を支配すると思っていた。クロト、ラケシス、アトロポスがその三姉妹である。彼女たちは誰の要望にも耳を傾けなかったから、彼女たちは the *Cruel Fates* あるいは the *weird sisters* と呼ばれた。
- \* 2648 類似の表現は『トロイルスとクリセイデ』3: 1200〈まさにポプラの葉のように震え出した〉(笹本訳)に見られる。
- \* 2680 『名婦たちの書簡』14: 44〈私は身を起こして、わななく手で剣をつかみます〉(松本克己訳) 参照。
- \* 2681 上掲書 14: 39-40〈軽やかな西風(ゼビュロス)で細い芒(のぎ)の先が揺れるように〉(松本克己訳) 参照。
- \* 2682 上掲書 14: 34〈なんの不安もなくアルゴスの町全体が、深い静けさに沈んでいたのです〉(松本克己訳) 参照。アルゴス Argon 『トロイルスとクリセイデ』5: 805, 934 では Arge となっている。Argos のこと。ギリシャ南東部、ペロポネソス半島北東部の古代都市。この都市国家は紀元前 7 世紀ペロポネソス半島を支配した。
- \* 2683 『名婦たちの書簡』14: 38〈私は新床(にいどこ)の中で、氷のように冷たくなっていました〉(松本克己訳) 参照。
- \* 2690-93 上掲書 14: 55-56〈でも私はまだうら若い女人の身、性(さが)も年も優しい盛りなのです。きゃしゃなこの手は荒



くれた武器を持つようにはできていません) (松本克己訳) 参照。

\* 2705 詳しい逃走描写を付け加えたのはチョーサー自身である。

\* 2723 チョーサーがこの作品を仕上げるができなかったことについて、納得のいく説明は今のところない。このヒュペルムネストラ伝は、完成まで1、2行不足して途切れているにすぎない。チョーサーは結末を付け加えるつもりがあったのか、まったくそうしなかったのか、それとも実際には完成していたが、最後の数行が無くなってしまったのか、現在知る方法はない。

#### 参考文献

- Baugh, A. C., ed. *Chaucer's Major Poetry*. New Jersey: Prentice-Hall, 1963.
- Benson, Larry D., ed. *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- Brewer, Derek. *Chaucer and His World*. London: Eyre Methuen, 1978.
- [デレク・ブルーアー著、海老久人・朝倉文市訳『チョーサーの世界—詩人と歩く中世』京都：八坂書房、2010.]
- Coghill, Nevill. *Geoffrey Chaucer*. London: Longmans, Green & Co., 1956.
- [ネヴィル・コグヒル著、安東伸介訳『チョーサー』(英文学ハンドブック) 研究社、1971.]
- Ellis, Steve. ed. *Chaucer: An Oxford Guide*. Oxford: OUP, 2005.
- Fisher, J. H., ed. *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977.
- Frank, R. W. *Chaucer and 'The Legend of Good Women'*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1972.
- Gray, Douglas. ed. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford: OUP, 2003.
- 池上忠弘『14世紀のイギリス文学—歴史と文学の世界—』東京：中央大学人文研究所、2011.
- 平川祐弘訳、ダンテ『神曲』東京：河出書房新社、1992.
- 地村彰之「会長挨拶—記憶と記録」*MES JAPAN News* No. 68, 2018. 1-2.
- 河崎征俊『チョーサー文学の世界—〈遊戯〉とそのトポグラフィー』東京：南雲堂、1995.
- 河崎征俊『チョーサーの詩学—中世ヨーロッパの〈伝統〉とその〈創造〉』東京：開文堂出版、2008.
- 梶井迪夫訳『完訳カンタベリー物語』(上・中・下) 東京：岩波書店、1995.
- 梶井迪夫『チョーサーの世界』(岩波新書966) 東京：岩波書店、1976.
- 松本克己訳、オウィディウス『名婦の書簡(ヘロイデス)』(「世界文学大系」67) 東京：筑摩書房、1967.
- Minis, A. J., ed. *Oxford Guides to Chaucer---The Shorter Poems*. Oxford: Clarendon, 1995.
- 宮田武志訳『善女物語』甲南大学文学会、1954。(『善女よもやま話』として大手前女子学園〈1982〉こびあん書房(1987)より発行)
- 中村善也訳、オウィディウス『変身物語』(上)(下)(岩波文庫) 東京：岩波書店、1984.
- 岡道男・高橋宏幸訳、ウェルギリウス『アエネーイス』京都：京都大学学術出版会、2001.
- 斎藤勇『カンタベリー物語—中世人の滑稽・卑俗・悔悛』(中公新書749) 東京：中央公論社、1984.
- 笹本長敬訳『カンタベリー物語』東京：英宝社、2002.
- 笹本長敬訳『トロイルスとクリセイデ』東京：英宝社、2012.
- 繁尾久『中世英文学点描』東京：伸光社、1982.
- 高橋宏幸訳『祭暦』東京：国文社、1994.
- 田中秀央・前田敬作訳、オウィディウス『変身物語』京都：人文書院、1966.

## A Japanese Translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* (3)

Akiyuki Jimura and Hisayuki Sasamoto\*

Department of Secondary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science  
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

\*Formerly, Professor of Osaka University of Commerce

(Received October, 2018; accepted December, 2018)

(Received October 25, 2018; accepted December 6, 2018)

This article consists of three parts: (1) an introduction to Chaucer, (2) a Japanese translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* (from 'The Legend of Lucrece' to 'The Legend of Hypermnestra') and (3) the explanatory notes and the textual notes of *The Legend of Good Women*. Our translation is based upon Larry D. Benson's text (1987). The two edited texts of A. C. Baugh (1963) and J. H. Fisher (1977) are referred to when necessary. In the translation of proper nouns, katakana does not correspond to English pronunciation, but mostly the original language. We do not distinguish the long and short vowels of Greek and Latin, when using katakana. Personification of abstract ideas are shown in angle brackets 〈 〉.